Career path

# 02 【国際機関で、日本の役割を果たす】

## グローバル・パートナーのEUと日本をつないでいきます。

冨安 健一郎
○ 平成9年入省
○ 欧州連合日本政府代表部（EU代表部）
○ 一等書記官（環境担当）

EUは、世界のGDPの約25%、総人口約5億人を擁する政治・経済統合体。国際社会の平和と繁栄に主導的役割を果たしています。私は、環境政策・気候変動政策を担当しており、日本の現状や今後の方向性を念頭に置きながら、EUの現状や今後の方向性、その決定プロセスや決定にいたる背景等について、様々な角度から情報を集め、整理し、日本に報告します。日本のグローバル・パートナーであるEUに対し、日本の現状、取組や今後の方向性等を上手く売り込んでいくことも重要になります。これらの仕事の基盤は、なんと言っても「人」です。人に会い、相手の話を聞き、こちらの話を伝える、という行動をひたすら繰り返します。ベルギー・ブリュッセルでの勤務も1年以上が経過しました。日本と異なる人、組織、社会等の様々な多様性に日々相対しながら、「自分がめざすゴールと様々な多様性とのつき合い方」という視点を大事にしていきます。

## アメリカに環境問題と向き合ってもらうために。

矢野 克典
○ 平成16年入省
○ 在アメリカ合衆国日本国大使館
○ 二等書記官（環境担当）

環境担当の書記官として、国務省や環境保護庁等の米国連邦政府と日本政府との橋渡しをおこなうことが私の役目です。米国政府関係者や地元有識者との意見交換等を通じて、米国の最新動向について情報収集をおこなうとともに、日本の取組についても積極的に紹介して、情報共有、意思疎通を図り、環境分野における日米間の協力関係の維持発展に取り組んでいます。ハリケーンサンディの影響により、米国人の気候変動問題に対する意識は変わったと言われています。オバマ大統領もスピーチの中で、「我々は、子供達が地球温暖化による破壊的なパワーに恐れることのないアメリカで生活することを望んでいる」と宣言しました。地球環境問題解決のキーとなる米国との関係強化を図り、米国を国際的議論の中心的な役割を担う立場に巻き込むために、日本として何ができるかを考え、日本からの働きかけの一翼を担っていきたいと考えています。

## 化学物質は、どこまで安全か？どこまで有害か？

相澤 寛史
○ 平成11年入省
○ 経済開発協力機構（OECD）環境局
○ 環境保健安全プログラム
アドミニストレーター

化学物質の安全性評価について、OECD各国行政官や専門家から構成されるタスクフォースなどの会合を開催し、様々なプロジェクトを運営しています。例えば、化学業界や電機業界、果ては石油採掘事業などで、どのような化学物質が発生しうるか、環境への排出量をどう計算するかという課題を極力標準化し、各国が参照できる文章を作成したり、まだ政策手法が十分確立していない化学物質の子供の健康への影響をどう評価して、どう環境政策に反映させるか、各国の取組を調べた基礎的な政策文章を作り、OECDとしてのプロジェクトをどう立ち上げるか議論しています。日本の数ある環境問題の中では比較的落ち着いている感のある化学物質対策ですが、欧米では、更なる国際的な対策ビジョンを考えて、着実に進めようとしています。私は国際的な視点も含めたビジョンを常に考えて、環境政策立案ができる人材になりたい。頭の回転、信頼される人間性、英語力が必要で、極めて野心的な目標ですが。

## 条約COP議長国としての国際的なリーダーシップを支えました。

野田 恭子
○ 平成15年入省
○ 国連環境計画
生物多様性条約事務局
○ 事務局長室
プログラムオフィサー補佐

日本は、2010年に日本で開催された第10回生物多様性条約締約国会議（COP10）の議長国として、新しい議長が就任する2011年10月のCOP11まで、条約の運営に国際的なリーダーシップを発揮してきました。議長の任期終了後も、生物多様性日本基金などにより途上国におけるCOP10の成果実施を引き続き支援しています。私が派遣された条約事務局での仕事は、条約事務局と日本との意思疎通を促し、スムーズに会議の開催や意思決定などをサポートすることです。COP11においては、開催国のインドも含めた三者三様の仕事のやり方の間を埋め、会議や関係イベントをうまく運営できるよう取り組み、成功裡に開催することができ、充実感もひとしおでした。これからもこうした経験から得られたグローバルな視点を生かしつつ、まずは足元から日本に住む一人ひとりがすばらしい自然を大切に思い、未来に引き継いでいこうと思える社会を実現することを目標に、仕事をしていきたいと思っています。